

モノと感覚移入・感情移入に関する基盤研究

大西宏志 (京都造形芸術大学准教授)

2011年度にはシンポジウム、展覧会の開催、研究報告誌の出版、ポスター発表などを行った。

■シンポジウム

2011年11月12日、遊狐草舎(京都市北区)にて、「触れることで情報を接地する試み」をテーマとしてシンポジウムを開催した。講演者は渡邊淳司共同研究員(NTTコミュニケーション科学基礎研究所)、松井茂東京芸術大学特任講師。

作家が素材や制作物に感覚・感情を移入する制作過程における、物と感覚・感情移入の関係性を、デジタルアプリケーション技術の事例研究を通じて検証した。3次元プリンタによってもたらされるものは、素材や形状との連続的な出会いであるモノづくりの過程ではなく、記号(設計図)と物質(制作物)の関係づけの変容と考えられる。また、鑑賞者がどのように作品に対して感覚・感情を読み取るのか、演出としての物と感覚・感情移入の関係性を、ワークショップの事例報告(心臓ピクニック:聴診器を自身の胸に当てて鼓動を計測し、それを心臓ボックスから音と振動として出力。そうすることで、参加者は自身の鼓動を音として聞くだけでなく振動として触れることを体験する)を通じて検証した。

■出版

2012年3月刊行の『モノ学・感覚価値研究』第6号(京都大学こころの未来研究センター、モノ学・感覚価値研究会)に、上記のシンポジウムの内容を掲載した。

■展覧会

2011年11月11日~13日、遊狐草舎(京都市北区)で展覧会「物気色11・11」を開催した。

全体のテーマは「モダンの死角、モノケハイをアートに依せて」で、出品作家は大西宏志、大船真言、狩野智宏、上林壮一郎、近藤高弘、スティーヴン・ギル、坪文子、山田晶、山本健史。

展覧会開催中にシンポジウムも行った。その講演者は鎌田東二、山本豊津(東京画廊)、原田憲一(元京都造形芸術大学教授)、稲賀繁美(国際日本文化研究センター教授)、小崎哲哉(美術ジャーナリスト)の各氏。

「物気色11・11」はモノ学・感覚価値研究会アート分科会が一貫して行ってきた、ものと美術の関係を探る研究会

的な展覧会である。人間は、日常、非日常を問わず物を作りだし、物に囲まれながら生きている。特に私たち日本人は「心を込めた物作り」や「物から心の動きを読み取る」と言うように、物に物質以上のニュアンスを見出し、心との強い関係性を感じる事ができる。このことを表現実践とシンポジウムによって検証した。

■ポスター発表

こころの未来研究センター研究報告会2011「こころを知り未来を考える〜絆がつくるこころ〜」にてポスター展示を行った。

京都大学こころの未来研究センター 平成23年度一般公募型連携研究プロジェクト

モノと感情移入・感覚移入に関する基礎研究

人間は、日常、非日常を問わず物を作りだし、物に囲まれながら生きている。特に私たち日本人は「心を込めた物作り」や「物から心の動きを読み取る」と言うように、物に物質以上のニュアンスを見出し、心との強い関係性を感じる事ができる。そこで、本研究プロジェクトでは、研究対象として、物を媒介とした感覚や感情の移入メカニズムを取り上げる。特に、芸術、デザイン、工芸の分野における、

(1) 作家が素材や制作物に感覚・感情を移入する制作過程における 物と感覚・感情移入の関係性
 (2) 鑑賞者がどのように作品に対して感覚・感情を読み取るのか、演出としての物と感覚・感情移入の関係性
 の二つの視点から研究を行う。

研究員	大西宏志	京都造形芸術大学
共同研究員	渡邊淳司	NTTコミュニケーション科学基礎研究所
共同研究員	松井茂	東京芸術大学
共同研究員	鎌田東二	東京画廊
共同研究員	山本豊津	東京画廊
共同研究員	原田憲一	元京都造形芸術大学
共同研究員	稲賀繁美	国際日本文化研究センター
共同研究員	小崎哲哉	美術ジャーナリスト

2011年11月12日(土)モノ学・感覚価値研究会アート分科会 連携企画 「触れることで情報を接地する試み」 渡邊淳司+松井茂

メディア技術とモノづくり、記号接地

記号として物質の低い情報としても対象との感覚を規定する実在認識としては個体によってその情報を意味づけることはできない

実在認識過程

記号認識過程

「デジタルアプリケーション」

ワークショップ「心臓ピクニック」